

文人墨客の宿 清輝楼 「小さなちいさな美術館」ご案内

創業元禄年間(1690年一階 文人の間)の清輝楼は、古来より多くの文人墨客に愛され続けてまいりました。江戸時代においては、土佐派・円山派・狩野派ら京都の様々な絵師達が訪れ、近代にいたっては野口雨情・菊池寛・吉川英治・河東碧梧桐など多くの作家・詩人達が幾度となく来館。数多くの襖絵や名書、詩歌などを遺していったのです。その彼らの息吹を、是非皆様感じて頂きたいと言います。館内を「小さなちいさな美術館」とさせて頂きたいです。代々の作品を二階・三階に、明治以降の作品を一階に展示。その範囲は大広間や客室内を含む全館に及んでいます。旅人は皆、文人墨客です。館内全体に散りばめられた彼らの足跡を散策していただき、あなたの足跡を是非残して行って下さい。

一階 文人の間
 ここでは明治以降に清輝楼に宿泊された文人達の書画がご覧になれます。
 (宿泊棟には立入) (ご遠慮下さい)
 売店 ロビー 宿泊棟

明治以降の文人達は全国を放浪された方が多くあり、清輝楼は彼らをお守り申し上げました。昭和に入ると作家のスタイルは変わり、出版社が作品のために旅館にお連れしたのでした。

「七つの子」「じゃぼんだま」などで有名な童謡詩人の野口雨情(1882-1945)。雨情は何百という数の童謡をつくり、私たちが知っている同様の大半が雨情の作品だと言っても過言ではありません。清輝楼には大正時代に二期間、昭和に入ってから一期間滞在しました。



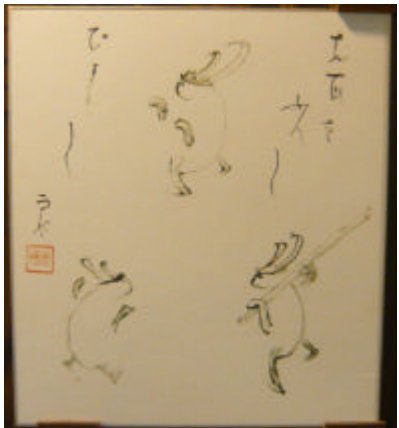
空を眺めて 高いこと 雨情



角をふりふり 行列だ 雨情



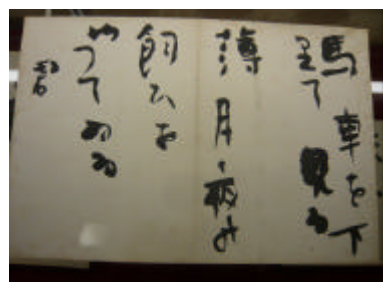
お耳をふりふり ぴよんぴよん 雨情



画帳のケース 河東碧梧桐(かわひがし へき) (とう)正岡子規の弟子で高浜虚子と双璧をなす。与謝蕪村の研究を主とし、宮津に滞在していた蕪村の足跡を訪ねて清輝楼に宿泊。それより来丹は十度を数える。この書は六朝体という書体。また一七文字を五・七・五に分けない「句またがり」を得意とした。



「馬車を下りて見る 薄月夜の飼いをやっている」



菊池寛。言わずと知れた文藝春秋を興した流行作家。清輝楼には昭和七年(十七年)まで度々来宿。岩見の間(明治時代の原型を留める部屋)が最もお気に入りだった様子。

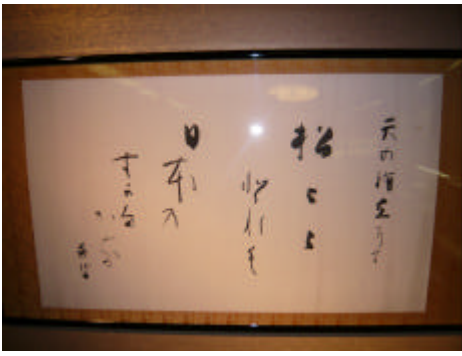


吉田茂(1878-1967)。元外務次官、駐英大使、外相、首相。

吉川英治。国民的作家。清輝楼には昭和十八年に宿泊。天橋立の松並木内で「天橋立大学」という名の文学講義が毎回有り、その講師として見える。昭和十八年という宮本武蔵、三國志を発表した後。

「天の橋立にて
松 松 松
どれも
日本の すがたかな」

この句はお気に入りだったようで青梅の吉川英治記念館にも遺されている。



売店・ロビー付近

(宿泊棟には
立入ご遠慮下さい)

宿泊棟

売店
ロビー

文人の間

稲垣稔次郎。型絵染の人間国宝。
清輝楼の浴衣、マッチなどのデザインを手がける。



上村松園。美人画で有名な女流絵師。彼女の師匠筋からの縁で。戦後初めて女性で文化勲章を受ける。



大正末期、昭和にかけての清輝楼のパンフレットの原画。当時流行した「鳥瞰図」北海道から東京をまわり、遠くは九州までが見える。吉田初三郎の弟子、金子常光の作。



明治初期の清輝楼の引き札。引き札二双の屏風。右面は、芦田均(元首相)、吉澤が書いてあるように見えるが実際は義則(国文学者)らの色紙。他お好みに応ず。当時は広告でも鑑賞にたえうる一つの作品だった。



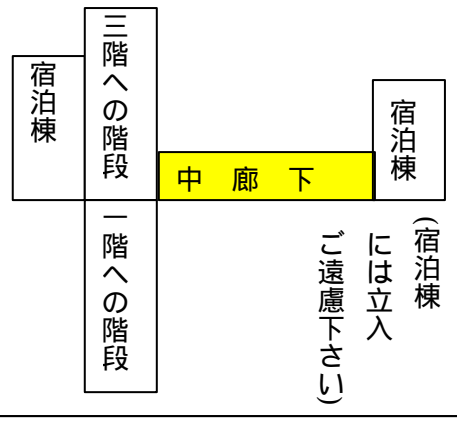
前 大峰(まえたいほう)。沈金の人間国宝。



製のもの。「大きな古時計」と親しまれていますが、昭和生まれは清輝楼ではまだまだ若い方でバリバリ現役です。長生きの秘訣は人間と同じでネジの巻き方を腹六分目くらいにしておくことです。



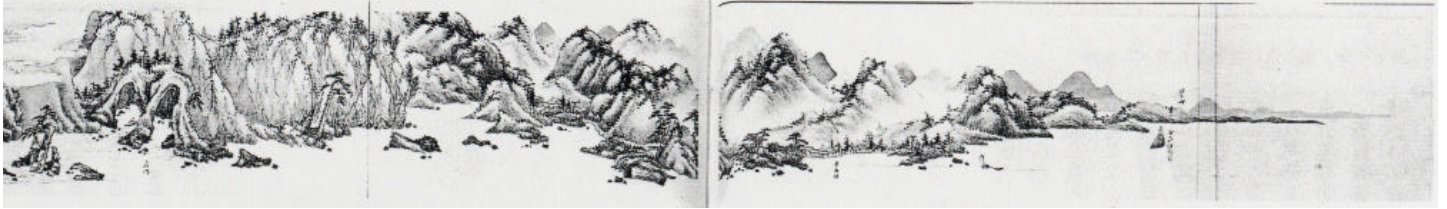
一階 中廊下



「一階中廊下はいよいよ江戸時代へ。与謝公海図」
 「線の上にある長い巻物に注目して下さい。全長九メートル十センチのこの巻物は一八〇五年に書かれたもので、丹後半島の先端、経ヶ岬から橋立付近までの、丹後半島の東海が見事に描かれています。」



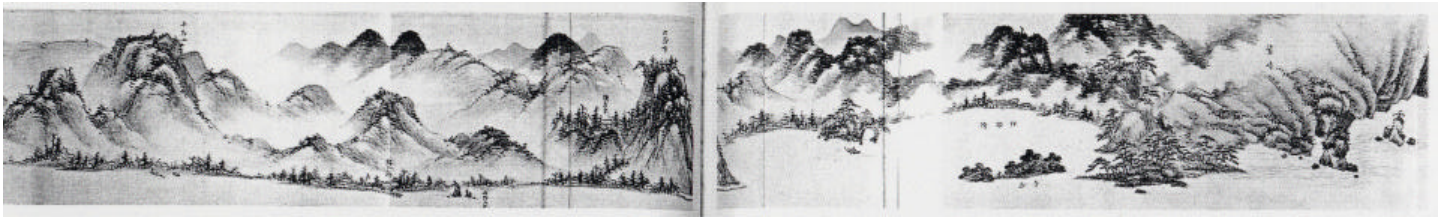
経ヶ岬から



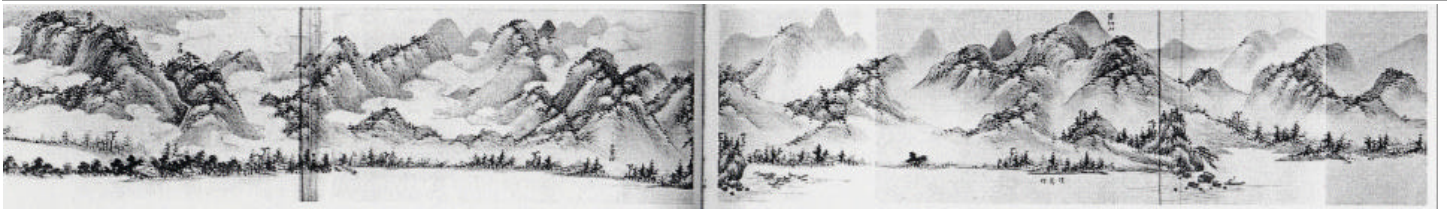
新井崎周辺



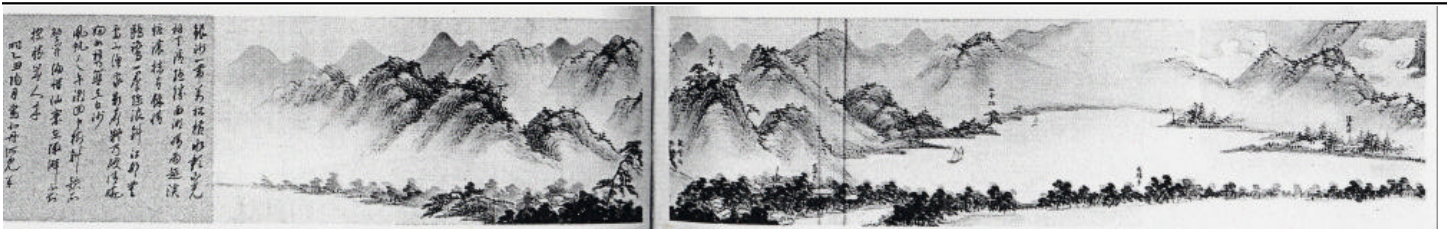
伊根周辺



波見、日置



天橋立



「もうひとりの写楽」李寧熙(イヨンヒ)著

韓国の著名な作家、李寧熙(イヨンヒ)氏(韓国日報文化部長・論説委員、国会議員)が清輝楼に調査にいらして右の本を書かれました。その大意は「李朝の天才宮廷画家、全弘道(ギムボンド)は一年余の間日本に渡り、「東洲斎」写楽のかくれ蓑の中で浮世絵を描く一方、火薬や火兵器の製造法・設備状況などを極秘裡に探索、スケッチしていた李朝の非公認特使であった。李朝に帰国後、全弘道は今度は個人的な立場で日本に再入国し、絵を画くことで生計を立てていた。清輝楼にある「与謝公海図」はその全弘道作品である。」というのです。写楽自身はあまりにミステリーに包まれており諸説ありますが、一つの説としては大変興味深い物があります。写楽の作品であってもなくても、この絵は大変素晴らしく、俯瞰すると感激を言えます。

末の贅ではこのように述べられています。

銀沙一帯にして万松横わり 水、彰われ
 山、光り 相共に清し 絶勝の西湖 晴雨の
 趣き 淡粧濃抹 村に余情あり 鷗鷺の一
 群 波をはしりて斜め 江村に処として漁
 らざるの家無く 数声の歌乃(あいたい)、清眸
 を破り 婦女箆を携えて白砂に立つ 風帆、
 へつちやく午潮回り 樹斜めにそばだちて
 石壁開く 偏に惜しむ 仙寰陬僻せんかんす
 うへきに在り 知らず探勝の幾人か来たる

浜	45 畳
奥	60 畳

「百百年の、十二ヶ月押し絵
「り襖」

「末の頃に画されました。
「の間近くから一月・二月・
三月・四月



「り口近くから四月・五月・
六月・七月・八月・九月・十
月・十一月・十二月

鈴木百年
文政八年(1825)~

明治二十四年
(1891)。平安人物

誌に名を連ねる有
名絵師。円山派と

岸派の影響を受け
るが自身は鈴木派

と呼ばれる振興の
流派を生み出し

た。明治に入り京
都府画学校を設立

する。
息子は鈴木松年

で天龍寺の龍の画
を描いたことで有

名。その松年の弟
子が上村松園にあ

たる。円山派の影
響のためか七月の

鯉と九月の犬の図
は円山応挙の作風

と評す方もあり。
京都の美術館でも

鈴木百年の画をこ
れだけ一堂に見ら

れることはなかな
かなく、現役の芸

術家も勉強に見え
る。



二月 一月



三月 四月



五月 六月



七月 八月



九月 十月



十一月 十二月



宮城県仙台にある輪王寺の無床の間の右にあるのは宮津藩主本
外和尚は書の道で大変有名な庄家の火鉢とお弁当箱。
方。その無外和尚の書を日本三この宮津は関ヶ原の戦いまでは細
景の旅館それぞれに一筆ずつ川家(幽斎・忠興・ガラシャ)が
遺す運動があり、松島・宮島・治め、それ以降は京極家(高友・高
天橋立の各旅館が一軒ずつ選広・高国)・永井家・阿部家・奥立
ばれて遺されました。清輝楼は家・青山家と続くが、最後にして
光栄にもその栄に浴し天橋立最も長く百年余り治めたのが本庄
の中で選ばれました。
右から読んで「蒼龍臥波」清輝楼お弁当箱は当時流行した四面をつ
楼の三階から天橋立を見るとかつて春夏秋冬をあらわす様式。
まるで「蒼い龍が波に臥(ね)て御重箱、お皿、小皿、お酒をいれ
るように見える」という意。
る筒の下には杯をいれる部分があ
り機能的ながら当時の技術の高さ
を思わせる。



「大広間の一番の特徴は、この天井。周囲がカーして格子になっている様式は折上格天井（おあげごうてんじょう）」と言います。奈良文化研究所によると二間続きで両方とも折上格天井になっている旅館は日本で二軒だけだと推測されること。



この大広間は大正十年代の普請ですが当時の建物の粋が結集されており、広間（奥）の床の間、床柱は紫檀か鉄刀木（たがやさん）と思われる、い棚はケヤキの一枚板が使われています。よ、お客様から「何故三階に大広間が？」とご質問頂きますが、柱が無い空間は最上階に持つべき、また眺望を重要視するのが当時の建築の常識だった様です。

三階大広間

浜	45 畳
奥	60 畳

階段

こちらには沢山の書が並んでいます。良く見ると様々な書体で書かれているので、沢山の人物が書いたように思いがちですが、実際は一人の人物が様々な書体を使って書き分けているのです。



この人物とは沢辺北溟さわべほくめい(1764~1852)宮津藩の儒学者であり、財政責任者の重職にあつた方です。ですからこの書はざっと二百年前の書となります。

『宮津藩文政一揆と沢辺北溟』

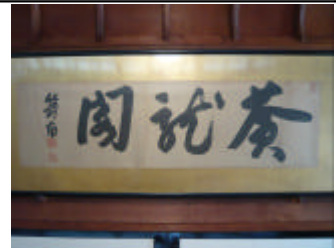
(宮津市歴史資料館史料より抜粋)

『山陰の宿儒と称された沢辺北溟は、藩主本庄宗茂(むねあき)の命により、文化一五年(1818)に藩校礼讓館を創設したが、一方では藩主宗茂の獵官運動の費用を賄うため、藩の御勝手頭(財政責任者)としての活動を余儀なくされ、藩財政の建て直しを図るとともに、学者としての名譽を投げ打ち、資金調達に奔走した。藩内の全ての人に課する人頭税「万人講」の実施をきっかけとして、文政五年(1823)十二月に全藩に及ぶ大一揆「文政一揆」が勃発した。一揆はほどなく鎮圧されたが、北溟はその責を負い蟄居謹慎となり、一揆勢側は、首謀者とされる新兵衛・為治郎の二名が処刑されるといふ、過酷な結末を迎えた。その後、一揆の犠牲者の供養が始められ、農民の側に立ち自殺した藩士栗原百助、その父理右衛門の顕彰も行われ、近代以降は義士義民として称えられた。』と、これまでの一揆物語はどのように伝えられていたが、新たな史料の発掘による最新の文政一揆像は、『藩士の処分の違いや北溟の回想録などから、一揆の真相は、栗原父子の逆恨みから秘密裏に進められるはずであった万人講を農民達に暴露したことに端を発すると考えられよう。』とされている。



当館は沢辺家と縁が深いようで、上は沢辺玄辰の鎧櫃。

大正末期の京都府知事 池松時和氏の書、「蒼龍閣」



宮津城。藩主本庄家は徳川方だったので明治四年には取り壊されてしまふ。外堀は現在の大手川。



宮津港に揚がった

北欧の皿



この宮津の町は城下町としても栄えましたが、北前船(きたまへぶね)(中世末から明治初年まで、奥羽・北陸諸港から日本海を通り、敦賀・小浜・宮津、さらには西回り海路で大阪・兵庫等の諸港にきた廻船)の港町として栄えました。この絵皿図は天保年間(1830年代)のもので、正確な地図が流布される前のもので、当時の日本観がわかるような気がして興味深いです。中には伝説の島々も描かれています。各地名は四方から読めるようになっていきますので、北前船の船頭さんがこれを囲みながら情報交換でもしたのでしようか。当時の港はいろいろなものが出回っていたようで、左上の北欧の皿なども多く宮津港に入ったようです。



まず玄閣で皆様をお迎えするのは馬天江（えま てんこう）の書。文（八年（1895）生まれ、明治三十四年（1901）没の江馬天江は書家・漢詩人・師として有名で、緒方洪庵に洋学をんだ後、梁川星巖に師事し漢詩を学だ。また、明治二年に開校した私塾命館では、塾長として儒学の講義を当した。

江山無盡蔵（こうざんむじんぞう）のあたりは大自然がいっぱいです、と字のまま解釈するか、大宇宙は限の広がりを持っており、その中で間ののはたす使命とは、と哲学的に解するか。幕末から明治維新の志士へ講義を思うと、後者かもしれませ



建物について。

創業は三百年近く前ですが、今の建物が出来たのは明治三十年代半ばです。何回か増築を重ねていますので、その時代時代の建築様式が楽しめます。

大まかに言うと玄閣入って、右手が明治ゾーンで左手が大正ゾーン。

明治ゾーンで一番古い原型がのこっている部屋を見ますと、床の間の落掛（おとしがけ）には鉄刀木（たがやさん）という相当高価な材が使われていたり、

床柱がどっしりと太い材が使われていたり、どちらかという野太い印象が感じられます。一方で欄間に目を向けると今では再現不可能な細かい細工がしてあり、その欄間の障子を開けるとさらに細工があるといった素晴らしい意匠です。



大正ゾーンに入ると明治に比べて細めの材を使用したり、銘木をちりばめて使うなど「大正ロマン」ではないですがちよっとおしゃれな印象が感じられます。

玄閣入ってすぐの衝立。

何の木と思われれますでしょうか。カリンという方もありますが、玉楠のようです。



北側階段付近の桜の木の意匠もおもしろいです。



トイレにも飾り天井が！どこかさがして見て下さい。



手作りガラスをさがせ！

もしお部屋の窓ガラスで気泡が入っていたり、よくよく見ると若干ゆがんで見えるガラスがあれば、それは戦前の手作りガラスです。運良く割れずに残っている箇所はまだあります。皆さんが必ず見られる

のは、大広間の女子トイレ横の窓ガラスでしょうか。

各お部屋の襖絵。

さりげなく襖に貼ってある絵や書は、江戸時代の作品が多いです。

蕪村の間は宮津藩の絵師、和田屏山の絵。入船の間の書は宮津藩士、沢村墨庵の漢詩。などなど。

旅人は皆、文人墨客。

これまでいろいろんな文人を紹介してきましたが、何も偉い先生ばかりが文人ではなく、旅するみなさんが文人なのです。ですからみなさんもその気になつて、短歌や俳句、川柳などに挑戦してみたいかがでしょうか。 役司直あし。

清輝楼の名の由来。

『清は水の澄みて明かなること、キヨシ又はアキラと訓ず、輝は輝に同じ、カガヤクと訓ず。易経（中国の四書五経の一つ）の中に「輝光日新其徳」とあり、清輝はキヨキヒカリの義なり』とされています。楼は当時三階建て以上の建物の名称ですから、英訳するとHOTELになります。

代々、日本文化を大切に守ってきました。「小さなちいさな美術館」として、それは、旅館にこれだけのものがある、とはすごいでしょう、ということが言いたいのではなく、これらのものが清輝楼に伝わってきたのは、当時の宮津には、これだけ高い文化水準があったのです、という「宮津の素晴らしさ、日本の素晴らしさ」を皆様にお伝えしたいからです。「何故これだけ長く続いてきたのですか？」とご質問いただきますが、当館で一番大切にしてきたことは「徳」と「種かりもの」という考え方です。今現在の清輝楼があるのはいついつい自分だけの力によるものと思いがちですが、ところが全てが先祖様から授かった「預かりもの」であり、歴代の従業員さんの御苦労の賜物なのです。ですから次の世代に正しく伝えていくことが私たちの使命ですし、清輝楼社員供養塔を建立し、世養をさせて頂き、思いを新たにしております。 十三代主人 徳田誠一郎